

第六幕

登場人物…

ハンプティ

ダンプティ

レン（ミソサザイ）

ロビン

マルレーン

ママ

パパ

客観的で淡々としたナレーション。

ロビン

「こうして、ジュニパー・ロビンは死んだ。

マルレーンは健気に兄の墓を掘る。

小さな手に大きなシヨベルで。

庭の片隅、ネズの木の下に、

ネズミの巣のような小さな穴を」

穏やかな昼下がりの陽射し、麗^{うららかに}らかで静かなBGM。

木漏れ日に包まれたネズの木の下でマルレーンが

せつせと穴を掘っている音が途中からフェードイン。

合間合間に息遣いや小さな掛け声を織り交ぜながら。

マルレーン 「はあっ」

掘り終えて汗を拭いながら一息吐き、

シヨベルを土に突き立てしやがみ込む。

足許には掘ったばかりの穴。

絹のハンカチで包んだロビンの骨をその中へ。

マルレーン 「棺はネズの木^{いっしょ}の根っこ。

お布団はマルレーンの一張羅、

絹でできたハンカチよ。

お花は何が良いかしら。

やっぱり白いのが良いよね、お葬式だもん」

語りかけながら少し涙ぐんだりしつつ。

マルレーン 「そうだ、あっちの茂みに…:」

立ち上がって小走りに近くの茂みへ。

白い薔薇の花が咲いている。

惚れ惚れとし、躊躇なく手を伸ばすマルレーン。

マルレーン 「いっぱい咲いてる。綺麗な薔薇の花…:痛っ」

薔薇の棘が刺さったりしながら、それでもめげない。

薔薇の花を摘んでいる最中の痛みに堪えている様子も。

マルレーン 「このくらいあれば良いかな」

戻ってきてまた穴の前にしゃがみ込み、花を並べていく。

花を全て並べ終え、お祈り。

マルレーン 「お休みなさい、ロビンお兄ちゃん…:」

立ち上がり、再びシヨベルを手にする。

穴を埋める音、シヨベルを振るう息遣い。

フェードアウトしながらナレーションを被せる。

最初のナレーションとは切り替えて、

ロビンの死後の魂が墓穴の中でぼんやりとしている風に。

ロビン 「柔らかく湿った土と、包み込む野薔薇の香り。

その中に紛れ込んだ微かな血の匂い。

これは…:多分、マルレーンが薔薇を摘んだ時、

棘に刺されて痛めた指から流れた血。

温かい。妹の、幼い命の温度。

冷えた僕の骨に沁みるその温もりが、

欲しくて、欲しくて、仕方なくて。

どうしてだろう…:泣きたくなかった」

駒鳥の鳴き声がすぐ傍で聞こえる。

ロビンの泣きたい、が駒鳥の鳴いた理由。

ロビン 「もつと、ママに。

愛して、欲しかった、な」

ふっとロビンの意識が遠のく。

それと同時にばさばさ、っと駒鳥の飛び立つ音。

ロビンが目を開くとそこは地上、鳥の姿。

ロビン 「……〈言葉を口にしようとして詰まる〉」

喋れないロビンの代わりに喉から出たのは駒鳥の鳴き声。

ロビンは甦ったが駒鳥の姿になってしまった。

ロビン 「〈何度か確かめるように鳴く〉」

レン 「おや、そこにいるのは駒鳥ロビン。

これはまあ……生まれたてのLovin, you」

第三幕同様、発音は正規の『ラヴィンニュー』よりも

若干『ロヴィンニュー』に寄せて。

レンのロビンに対する二人称として

『マイハニー』的なニュアンスで使用される。

軽快な羽音を響かせ傍らに降り立つレン。

ロビン 「〈戸惑いながら問いかけるような鳴き声〉」

レン 「うん？ 嗚呼、知らないのかい。

駒鳥は神の雄鳥おんどり、この僕ミソサザイは神の雌鳥めんどりって

言われてるんだよ、不思議だよね。

だから、僕は見ず知らずの君とも夫婦なのさ」

ロビン 「〈困惑しきつたような小さな鳴き声〉」

レン 「何だい、Lovin, you?」

解る、解るよ、君が困っちゃうのもね。

でも、そういうものなんだから仕方ない。

決まりは決まりさ。

ところで、君はどうして泣いてるの？」

次のくだりはグリム童話『ネズの木』よみがえで

殺された少年ロビンが鳥として甦った際に歌うもの。

少々長いので、単にリズミカルに朗読するだけでもよし。

ロビン 「♪ママが僕を殺し、パパが僕を食べ、

妹が僕の骨を残らず捜し、

絹の布にくるんでネズの木の下に埋めた」

今のロビンが音にできるのは、鳴き声と先程の歌だけ。
少し面倒臭そうにレンが顔を顰める^{しか}。

最初の一行は独り言、二行目から普通に。

レン 「へえ、歌なら声にできるんだ。にしてもこの歌……。

なるほど、そういう事か。〈小さく舌打ち〉

嗚呼、いや、ごめんよ、君は何も悪くない！

〈深い溜息〉

くるくると忙しくテンションを変化させるレン。
わざと大袈裟にしているように聞こえるくらいに。

ロビン 「……〈心底困ったような鳴き声〉」

レン 「それにしたって、こんな悪趣味な事をするのは誰だ？

外道も外道、マザー・グースより性質が悪い^{たち}。

悲劇は詰め込みや良いってもんじゃないでしょ。

ナンセンス以上にセンスが悪いよ、んっともう」

そわそわするロビンに気付いて笑顔を作る。

ロビンに語りかける部分は甘く、あたかも恋人のように。

世界やマザー・グースについて語る部分はシリアスに。

緩急をしっかりとつけて。

レン 「嗚呼、ごめんよ、ごめん。

そうだ、綺麗な声の可愛いロビン。

君に僕からプレゼントをあげよう。

金の鎖に、可愛いお靴、それからあともう一つ。

少し重たいけど……よいしょっと、この石臼さ！

遠慮しなくて良い。

そもそも元々僕の物じゃないからね。

君が歌を歌ってくれれば、

そいつは勝手に手に入るようになってるんだ。

そういう魔法、そういう呪い、そういう筋書き。

これが、マザー・グースに匹敵する

偉大な創造主、グリムの力さ。

誰がそんな別世界の魔法をこのマザー・グースの世界に放り込んだのかは知らないけどね」

鎖と靴と石臼をロビンに手渡すレン。

レン 「何から何まで訳が解らないって顔だね。

大丈夫、じきに全部意味ができるさ。

さ、それを持って家うちにお帰り。

ラヴイン、you」
L o v i n , y o u」

これ以上の事は自分にはできないというように寂しげに。

ロビン 「……」

感謝の気持ちでレンの目尻についばむような可愛いキス。不意打ち過ぎて一瞬何が起こったか理解できないレン。

レン 「……？ ……！」

遅れて状況を把握して驚き。

ロビン 「ア、リ、ガト」

更にロビンが人語を話した事への驚き。

レン 「嘘だろ……喋っ、あ、ちよっ！」

ぱたぱたと逃げるように飛び去るロビンを見送って、盛大に溜息を吐きながら目尻をこする。

レン 「っはあ、これだから嫌んなるよ、まったくもう。

……魔法より性質たちが悪いじゃんか。

てか、かかってんの、かかってないの!?

あーもう！」

自ら木に頭をぶつけて平常心を取り戻すレン。

レン 「……ますます、許せなくなるじゃないか。

マザー・グース」

最後は少し殺意を滲ませて。

レンはわざと軽いスタンスを装っているキャラだが、ここでは殺意までは軽く装いきれなかったという風むこに。無事のロビンが意味もなく殺される筋書きへの腹立ち。

なお、レンもメタ視点を持っているため
会ったばかりの時点からロビンに肩入れした訳ではない。
純粋なロビンの様子に庇護欲が湧いたといったところ。

く場面転換く

飛び去ったロビンがネズの木枝に止まる。

台所の窓を見下ろすとママが片付けをしている。

ロビンの持ち物を見付けてはずた袋に放り込んでいく。
せいせいする、というように楽しそうに鼻歌混じり。

ママ 「もうあの子のものは要らないわね。

やつと処分できるわ、あれもこれも、それも！

うふふ、くすくす」

継母や姉がシンデレラをいじめる時のように、
わざとらしく大袈裟に。

ママ 「汚らしい靴！

何これ？ やあだ、ポケットに小石！

信じられないわ」

床に綺麗な小石がばら撒かれる。

ロビン 「……（哀しげな泣き声）」

ママ 「あら、随分と辛気臭い声で鳴く鳥ね」

ロビンの声に気付いたママが窓から顔を出す。

ママ 「嗚呼、まだ雛鳥うちじゃない。

あんまり家の周りで鳴くんじゃないわよ。

煩いのは嫌いな、しっしっ」

追い払おうとするママにかちんとしたロビン。

歌なら声になるとレンに言われたのを思い出し、歌う。

ロビン 「♪ママが僕を殺し、パパが僕を食べ、

妹が僕の骨を残らず捜し、

絹の布にくるんでネズの木の下に埋めた」

歌詞の内容に顔を引き攣らせるママ。

ママ 「この鳥、今何て……いいえ、そんなまさか。

いや、でも……。マルレーン、マルレーン！」

落ち着きなくうろろし、子供部屋に向かって大声で。

マルレーン 「なあに、ママ？」

ママ 「マルレーン、あんたロビンの骨を何処にやったの？」

マルレーン 「お兄ちゃんのお骨？ えっとね。

ハンカチで包んでお庭のネズくるの木の下に埋めたよ」

ママ 「……」

青い顔でロビンとマルレーンを交互に見るママ。

マルレーン 「いけなかった？」

ママ 「あの人にはこの事は」

遮るようにロビンが歌う。

これまでよりもしつかりとした声で、糾弾するように。

ロビン 「♪ママが僕を殺し、パパが僕を食べ、

妹が僕の骨を残らず捜し、

絹の布にくるんでネズの木の下に埋めた」

マルレーンは歌詞があるという事に気付かない様子で、

駒鳥の鳴き声を聞いて窓に駆け寄る。

以下、ロビンの歌に途中から被せていく。

もし歌が早く終わってしまうようであれば、

『♪ママが僕を殺した』の一節だけ予め収録しておき、

一度歌が終わった後はそこだけリピート。

主にママに対する責めという意図から。

マルレーン 「わあ、鳥さんが鳴いてる。綺麗な歌声ね！」

ママ 「綺麗ですって？」

マルレーン 「ねえ、パパ。パパ、来て！」

窓の外で鳥さんがお歌を歌ってるわ」

寝室からパパが出てくる。

仕事はお休み、眠そうに目をこすりながら。

パパ 「ううん、お早う。パパはまだ眠いんだ……おや」

ロビンの歌を聞くと眠気が少し覚めた様子で。

パパ 「へえ、あれは駒鳥だな。まだ若い、小鳥みたいだ」

マルレーン 「駒鳥さんっていうの？」

ねえ、もつと歌ってちょうだい、素敵なお歌を！

そのまま、ネズの木の上でね」

最後の一行はお墓の兄にも聞かせたいという気持ちから。

ママ 「……苦々しげに齒軋り」

パパ 「どうした、お前？」

ロビン 「へ皆を外へ誘うような鳴き声」

マルレーン 「あら、もう止めちゃうの？ んん？」

ロビンの様子を目に止め。

マルレーン 「外に出てきて欲しいのかしら」

パパ 「うん？ どれ」

窓から顔を出したパパの手にロビンが金の鎖を落とす。

パパ 「……驚いたな」

マルレーン 「何？ 今駒鳥さん、パパに何をくれたの？」

パパ 「見てごらん、お前、マルレーン。」

これは金だ、金の鎖だよ。たまげたな……」

マルレーン 「わあ！」

はしやぎながらマルレーンが勝手口から外に飛び出す。

パパも後について外へ。

パパ 「駒鳥君、こんな物貰ってしまったって良いのかい」

ロビン 「へ領きながら一鳴き」

マルレーンの上に移動して、今度は靴を落とす。

マルレーン 「へ……これ、お靴？」

すごい、真っ赤な薔薇のお花みたい！

これも、良いの？」

ロビン 「へ領きながら一鳴き」

ママ 「……気味が悪いわ。」

「そんなもの、二人とも捨てておしまいなさいな」

マルレーン 「ええ、嫌よママ！」

パパ 「そうだよ、駒鳥からの贈り物なんて素敵じゃないか」

ママ 「あんた達はおかしいと思わないの!？」

あの歌といい、妙な贈り物といい」

ヒステリックに怒鳴るママの上へ飛んでいくロビン。

ママ 「嗚呼、来ないでちょうだい！ あっちへ行って！」

ロビン 「……。」

♪ママが僕を殺したからだよ」

冷たい声、これも台詞の内容はママにだけ聞こえている。

ママ 「いや、許して、あたしが悪かった！

だから、ロビ」

ぐしゃっ、ロビンの落とした石臼がママを押し潰す。

ママ 「ぎゃああああ!!」

父娘 「「ママ（お前）！」」

最後にロビンのナレーション。

ロビン 「こうして、ママは死んだ。

パパには金の鎖。

マルレーンには僕の血が染みた赤い靴。

そして、不思議な事に復讐を遂げた僕は生き返り。

人間のロビンの姿で、パパとマルレーンと一緒に

末永く幸せに暮らしたのだとさ、と。

……そうなるはずだった」

双子 「♪ Who Killed Cock Robin」

ロビン 「その囁きさえ聞こえなければ」

ヒュッ、と矢が風を切ってロビンの胸に突き刺さる。

ぱたりとロビンが地に落ちる音。

静寂。

双子 「「へくすくす笑い」」

解説..

ロビンとレンは双方性別は男として描写。

駒鳥には雄しかおらず、ミソサザイには雌しかいない、
そしてこの二種はつがいである、

とかつてイギリスでは信じられていた。

性別の食い違いはその迷信に対するアンチテーゼ。

なお、レンもメタ視点を持つ前は

迷信に従って自身を女と認識していたと思われる。

ロビンからレンへのキスについては、

迷信の影響をとっぷり受けているロビンが感謝の意を

より恋人らしい行動へ勝手に昇華したという解釈で。

監督へ..

一見BL誤解要素があるので、

路線修正が必要でしたらレンは女に変更可です。

また、レンが渡した時点では靴に色はありません。

ロビンが持ち歩いている間に血で赤く染まりました。

もしイラストを起こす場面があればそこだけご留意を。

駒鳥の胸は赤く（実際はオレンジに近いですが）、

十字架に架けられたイエスの痛みを癒すため、

彼の側で歌を歌っていて（またはいばらの冠を

外そうとして）、その際にイエスの血によって

胸が赤く染まったからとする逸話が残されています。